

父親に対するアタッチメントタイプの分類と関連要因の検討

東京大学発達保育実践政策学センター 大久保 圭 介

Classifications of infant attachment with their father and examinations of the correlates.

The University of Tokyo, The Center for Early Childhood Development,
Education, and Policy Research, OKUBO, Keisuke

要 約

本研究は、日本の乳幼児の父子関係におけるアタッチメントタイプを評定し、その関連要因を検討することを目的とした。子どものアタッチメントタイプは、ストレンジ・シチュエーション法によって評定した。本稿では、その関連要因として、子どもの月齢、性別、就園などの基本的な情報に加えて、父親の育児の楽しさ、育児分担量、平日と休日それぞれの育児時間との関連を検討した。30 ケースの評定の結果、回避型が 20%、安定型が 57%、アンビバレント型が 23%であった。アタッチメントタイプの分類に関して、母親を呼ぶケースや、分離場面に強い泣きを示すが再会場面で近接を示さずに落ち着くケースなど、特殊なケースがいくつか見られた。また、アタッチメントの 3 タイプ、あるいはアタッチメント安定 / 不安定の 2 値と、育児の楽しさ、育児分担量、育児時間などは有意な関連を示さなかった。

【キーワード】 アタッチメント、ストレンジ・シチュエーション法、父子関係、育児時間

Abstract

The purpose of this study was to classify attachment types in the father-child relationship of Japanese infants, and to examine the factors associated with these attachment types. The attachment types were assessed by the Strange Situation Procedure. In this paper, in addition to basic information such as the infant's age, gender, and preschool enrollment, we examined the relationship between attachment and fathers' pleasure in parenting, the amount of parenting responsibilities, and the amount of parenting time on weekdays and holidays. The results of 30 cases showed that 20% were avoidant, 57% were secure, and 23% were ambivalent. Regarding the classification of attachment types, some special cases were found, such as cases that children called for their mothers and cases that showed strong crying during separation but calmed down without showing proximity during reunion. The three attachment types or the two values of stable/unstable attachment were not significantly related to the pleasure in parenting, the amount of parental responsibility, or the amount

of time spent parenting.

【Keywords】 attachment, strange situation procedure, father-child relationship, parenting time

問題と目的

近年の父親は「新しい父親 (New Father)」と言われるように (Altenburger & Schoppe-Sullivan, 2020), 父親はお金や食料を調達するだけでなく, 子どもの世話も行う必要があることがスタンダードな価値観として浸透しつつある。2000年以降は, 子どもの発達における父親の特異的な影響に関する知見が蓄積されてきており, ここ数年の発達心理学において, 父子関係は最も関心の高い分野の一つであると言える。

アタッチメント理論においても, 父子関係への関心は高まっている。2010年以降, 父子関係のアタッチメント研究に関するレビュー論文や概説書などが出版されている (Bretherton, 2010; Palm, 2014)。2020年には『Attachment and Human Development』誌でも, 父子関係におけるアタッチメント研究の特集号が組まれた。ところが特に乳幼児を対象とした父親に対するアタッチメントの研究は十分にされているわけでは決してない。最近のメタ分析でも, ストレンジ・シチュエーション法 (以下, SSP とする) という代表的な手法を用いて父親とのアタッチメントを評定している研究としては, これまで世界でせいぜい十数件の研究しか挙げられていない (Madigan et al., 2023)。実際のところ, 父親に対するアタッチメントについては, 測定方法の妥当性や階層的な父親の位置付けなどの観点から, まだ不明瞭な部分が多くあり, 研究数自体の増加が期待されている。

子どもが保護者に対してアタッチメント行動を向けること自体は通文化的である一方で, その行為の向け方の分類には文化差がある可能性が議論されている。例えば, 日本を含む東アジアでは, SSP中に強い泣きや攻撃的な行動を示し, 不安を鎮静化することが苦手なアンビバレント型の割合が多く, 泣きやストレスを表面的には示さず, 保護者を無視したり逃げたりするような回避型の割合が少ないことが示唆されている (Madigan et al., 2023)。こうした背景もあり, アタッチメントの文化差の議論によって, アジアの SSP データが求められている。

以上のことを踏まえ, 本研究では, 日本の乳幼児の父親に対するアタッチメントタイプを評定することを目的とする。また, 評定したアタッチメントタイプと, 父親や子どもの要因との関連について検討することも目的とする。

本研究では, 子どものアタッチメントタイプを評定し, そのアタッチメントタイプと父親育児の量と質の関連を検討する。これまでの研究で, 子どものシグナルから, 感情や欲求を的確に読み取り, 迅速に反応することができることを指す感性性は子どものアタッチメント安定性を最も強く予測する要因の一つとして考えられている (Verhage et al., 2016)。しかし, 父子関係では, アタッチメント安定性の分散に対する感性性の説明率は, 母子関係よりも低いことが指摘されている (Bretherton, 2010)。その理由の一つに, 一般的に, 母親と比べて, 父親が子どもに関わるのは, 日常的なケア場

面よりも遊び場面が多いということが挙げられる。すなわち、父親の場合は、遊び場面での関わり方が、子どもの発達において重要である可能性がある。そのことを踏まえて、本研究では、感性に加えて、遊び場面における父親の関わり方の質にも焦点を当て、それらと子どものアタッチメントタイプとの関連を検討することを目的とする。また、基本的なデモグラフィック情報に加えて、その他関連する父親の要因として、父親の育児に感じる喜び (pleasure in parenting) や精神的健康、子どもの要因として、問題行動に関する指標、父子の心拍変動などを測定し、それらとの関連も検討する。

方 法

参加者

研究に先立って、本研究で使用予定の評定方法を用いた先行研究 (Laranjo et al., 2008; Whipple et al., 2010; StGeorge & Freeman, 2017) を参考に、検定力分析を行ったところ、およそ 40-100 名のサンプルサイズが適当であることが分かった。Covid-19 の感染状況を踏まえながら、可能な範囲で、40 組の父子の観察データを得ることを目指した。本研究では、首都圏に住む 12-18 ヶ月の子どもをもつ父親を対象として、参加者の募集を行った。著者が所属する組織の Web ページに研究参加者募集フォームを掲示するとともに、同組織の「子ども研究員」にすでに登録している人のうち、本研究の対象月齢の子どもを持つ人に連絡を取り、参加を募集した。また、文京区、渋谷区、港区の子育て関連の部署に連絡を取り、図書館や子育て広場などにチラシを配布してもらった。

2023 年 1 月に 2 組の親子 (1 組目は母子) の参加者に対し予備調査を行い、2023 年 3 月より本調査を開始した。本稿では、2023 年 8 月までに集まった 30 組の父子 (うち 1 組は予備調査の参加者) のデータの分析について報告する。30 組の父子データについて、父親の平均年齢は 37.03 歳 ($SD = 4.69$)、子ども (男児 13 名、女児 17 名) の平均月齢は 15.34 ヶ月 ($SD = 1.78$) であった。30 組のうち、22 組は母親やきょうだいも一緒に来学した。子どものうち、15 ケースは保育園や幼稚園などに通っていた。

なお、本調査は 2023 年 11 月現在も継続して参加者を募集しており、2023 年 11 月末で 50 組の参加者のデータを得る予定となっている。以下で述べるように、本研究ではデータの分析に時間を要するため、本稿ではまず 30 組のデータを分析した結果について報告することとした。

実験手続き

実験は以下の手順で行う。まず、前室にて実験についての説明と同意の確認を得た後、実験室に移動し、ストレンジ・シチュエーション法を実施する。SSP の手順は表 1 の通りである。SSP の終了後、続けて父子に 15 分間のフリースプレイを行ってもらった。フリースプレイの終了後は、実験者が入室し、アンケート、インタビューの順に実施した。合計で約 75 分程度であった。実験室への入室から退室までをビデオカメラで記録し、インタビューは IC レコーダーで録音した。SSP の後、フリースプレイに泣き止むことができず、泣きが継続することが想定された場合は、フリースプレイを短縮したり、ア

ンケートを持ち帰りにしたりすることで対応した。

表1 SSPの実施手順

エピソード	時間	詳細
1	1分	実験者が親子を部屋に誘導する。部屋には親子のみ。
2	3分	親子のみ。子どもは落ち着いておもちゃで遊ぶ。親は必要以上のアシストはしない。
3	3分	親子とストレンジャー 最初の1分：ストレンジャーが入室する 次の1分：ストレンジャーは親と会話する 最後の1分：ストレンジャーは子どもと遊ぶ
4	3分*	ストレンジャーと子ども（1回目の分離） 親が部屋から出る
5	3分	親と子ども（1回目の再会） 親が部屋に戻り、ストレンジャーはすぐに部屋から出る
6	3分*	子どものみ（2回目の分離） 親が部屋から出て、子どもが一人で部屋に残る
7	3分*	ストレンジャーと子ども ストレンジャーが部屋に入り、子どもと一緒にいる 必要があれば相互作用をする
8	3分	親と子ども（2回目の再会） 親が部屋に戻り、ストレンジャーはすぐに部屋から出る

*がついているエピソードは子どもの様子に応じて短縮する。

調査内容

子どものアタッチメントタイプ 録画された SSP 中の行動を元にアタッチメントタイプは評定された。著者は SSP のトレーニングを受け、基本的な信頼性テストには合格している。SSP の評定は通常、2 名以上の評定者による評定結果を照らし合わせることで評定の妥当性を担保するが、本研究では、現状、著者のみの評定結果を使用している。なお、現時点の分析においては、ABC の 3 類型のみの評定を行った。

父親の育児についての喜び Fagot (1985) の Pleasure in Parenting Scale を参考に作成した項目について（例、子どもをお風呂に入れる、子どもを寝かしつける）、どれくらい楽しんでいるかを 5 件法で尋ねる。また、インタビューのなかでも「普段の生活で子どもの世話をするとき、どのような気持ちですか」、「子どもとの関わっていて、どんなときに楽しい、嬉しいと思いますか」などという質問への回答を求める。信頼性係数は $\alpha = .85$ であった。

父親の育児分担割合 McBride & Mills (1983) の Parental Responsibility Scale を参考に作成した 14 項目について（例、子どもの服を買う、子どもの着替えをする）、父親の普段の分担割合を尋ねた。参加者には、「次の 14 個の項目について、それぞれ自分が何%しているか教えてください。例えば、子どもを予防接種や乳幼児検診に連れて行くのはいつも父親であれば、項目 1 のところには 100 (%) と書いてください。2 回に 1 回くらいであれば 50 (%) としてください」という教示文を読み、割合を記入してもらった。14 項目の信頼性係数は $\alpha = .87$ だった。14 項目について、MAP 基準やス

クリープロットでは2因子モデルが最適であることが示されたが、探索的因子分析を行うと、両因子から同程度高い負荷を受ける項目などが複数見られた。先述のように、14項目を1つのまとまりと考えた場合でも、十分な内的信頼性を示しているため、本稿においては、1因子の育児分担当として分析で扱った。

父親の育児時間 「あなたの普段の一日あたりの平均的な育児時間を平日・休日ごとに教えてください。」という教示文を読み、平日と休日それぞれの育児時間を記入してもらった。

デモグラフィック項目 その他、子どもの性別や月齢、就園の有無、出生体重、在胎週数、父親の年齢、学歴、就労形態、世帯収入についての情報を得た。

なお、当初は、フリースレイト場面の父親の関わりから、父親の感受性（子どものシグナルに対する正確で迅速で温かい対応ができる性質）と stimulation（程よく刺激的な関わり）の評定をすることを想定していたが、感受性の評定に膨大な時間がかかってしまうため、本稿においては感受性についての結果は取り扱わないこととした。また、本稿で扱っていないが、父親から、GHQ-12 (Doi & Minowa, 2003) の回答を得ることで父親のメンタルヘルスを、CBCL (Child Behavior Checklist; Achenbach & Rescorla, 2000) への回答を得ることで、子どもの内在化・外在化問題についても測定している。実験中、父子にはともに心電計を装着してもらい、心拍データも収集しているが、これも本稿執筆時点では分析していない。

倫理的配慮

本研究は著者の所属大学の倫理審査専門委員会から実施の許可を得た上で、実施している（審査番号 22-343）。また、参加者には、子どもの体調や安全を最優先してもらうことを伝えた。

結 果

アタッチメントタイプの分類

30 ケースの分類の結果、Aタイプが6 ケース（20%）、Bタイプが17 ケース（57%）、Cタイプが7 ケース（23%）となった。30 ケースの中には、いくつか特徴的なケースもあった。例えば、分離・再会場面において、明らかに母親の名前を呼んでいるケースが数ケース見られたが、本稿においては、マニュアルの泣きや行動の評定基準に基づいて、強制的にタイプ分けを行った。

他変数の記述統計

アタッチメントタイプ以外の変数の記述統計量を表2に示した。

表2 他変数の記述統計量

	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	Min	Max
育児の楽しさ	4.04	0.61	2.90	5.00
育児分担	36.67	15.26	14.29	80.00
平日の育児時間 (分)	146.28	97.20	10.00	360.00
休日の育児時間 (分)	503.79	198.57	120.00	900.00

アタッチメントタイプと他変数の関連

次に、アタッチメントの3タイプの間で、育児の楽しさ、育児分担量、育児時間（平日・休日）に得点の差があるかを検討するために分散分析を行った。その結果、育児の楽しさについては $F(2, 27) = 2.09, p = 0.14$ 、育児分担量については $F(2, 27) = 0.35, p = 0.71$ 、平日の育児時間については $F(2, 26) = 0.42, p = 0.66$ 、休日の育児時間については $F(2, 26) = 1.16, p = 0.33$ であり、いずれも5%水準で有意とはならなかった。

アタッチメント安定性 (Secure/Insecure) と多変数の関連

アタッチメントタイプのうち、アンビバレント型と回避型を不安定型とし、安定型と不安定型の2値を予測するロジスティック回帰分析を行った。結果は表3の通りである。いずれも5%水準で有意ではなかった。

表3 アタッチメント安定性を説明するロジスティック回帰分析

	Estimate	SE	<i>p</i>
子どもの年齢	-0.19	0.33	.56
子どもの性別 (0=男児, 1=女児)	-0.01	1.09	.99
就園の有無 (0=未就園, 1=就園)	0.00	1.10	1.00
父親の年齢	0.05	0.12	.65
育児の楽しさ	1.27	0.84	.13
育児分担量	0.03	0.04	.45
平日の育児時間	0.00	0.01	.55
休日の育児時間	0.00	0.00	.88

考 察

本研究では、日本の父子関係におけるアタッチメントタイプを評定し、その関連要因の検討を行った。まず、アタッチメントタイプの分類について考えたい。

日本の父子関係におけるアタッチメントタイプの分類

本研究における30ケースのアタッチメントタイプの分類は先述の通りで、安定型が約57%であり、アンビバレント型と回避型の割合がほぼ同程度であった。Dタイプの評定を行っていないという制約があるものの、ほぼ最近のメタ分析における分類と同じような割合であった(Madigan et al., 2023)。先行研究で示唆されているような、日本人におけるアンビバレント型の割合の高さは、今回の結果からは示されなかった。もちろん分析したサンプルサイズは十分とは言えないが、欧米サンプルの先行研究と大差ない分類を示したということは、一つの重要な結果であると言える。ただし、先述したように、いくつか特徴的なケースが見られた。まずは、分離場面や再会場面において、母親の名前を呼んでしまうケースである。本研究ではアンビバレント型に分類したケースの一つは、明らかに母親と離れたこと(3人で来学し、控え室で説明を受けた後、父親と二人で実験室に移動したため、実験の前に「母親との分離」を経験している)へのアンビバレントな反応を示していた。強い泣きやその継続時間などからアンビバレント型に分類したが、父親に対するアンビバレントな反応と言えない可能性があり、評定しない方が良いケースとも言えるかもしれない。

本研究のサンプルに見られたもう一つの特徴は、分離場面で強い泣きを示すのにも関わらず、再会場面で近接を見せずに、落ち着くケースがいくつか見られたことである。すなわち、回避型は泣きを見せることがほとんどなく、分離場面で泣いたとしてもEp.7でストレンジャーが入室したタイミングで泣き止むことが知られている。また、もし分離場面で泣くのであれば、再会場面では何らかの近接やあるいはアンビバレントな行動(攻撃行動など)を見せることが一般的である。ところが本研究のいくつかのケースでは、そうした典型的な反応ではなく、評定のマニュアルにないような反応を示した。本研究では、再会場面における反応をもとにアンビバレント型として分類を行ったが、日本独自の、あるいは父子関係に特異的な反応であるとも考えることもできる。一般的に、父親の役割の一つに「ただそこにいること(just being there)」が挙げられる(Palm, 2014)。本研究で見られた上記のケースでも、部屋に父親が戻ってきたこと、父親の存在があることで安心し、子どもは泣き止んだと考えることもできる。このような特異的な反応については、海外の研究者と議論しながら、どのように扱うのが良いか今後判断していく必要があるだろう。

アタッチメントタイプと他変数の関連

本研究では、育児の楽しさや育児分担量、育児時間との関連を検討したが、いずれも現時点では有意な差が見られなかった。上記の変数のなかでは、適切なサンプルサイズになれば、育児の楽しさについては、Secure/Insecureを予測する要因としてやや差がありそうな様子であったと言える。また、育児分担量や育児時間に関しては、有意でないことはもちろん、ほとんど効果がなさそうであった。育児時間が問題視される父親に対して、育児の量が父子関係におけるアタッチメントとほとんど関連なさそうであったことは、実践・介入の観点から重要な結果であるとも言えるかもしれない。やはり先行研究で示唆されているように、アタッチメントに対しては、関わりの質を分析する必要があるだろう。

う。また関わりの方との組み合わせによって、例えば、関わりの方が悪い場合には、たくさん関わる事がアタッチメント安定性につながるようなことも考えられるだろう (Brown et al., 2012)。

限界点と今後の課題

本研究では、当初、フリープレイの場面の関わりから、MBQS (Maternal behavior Q-sort; Pederson et al., 1999) を用いて感性を、Olsavsky et al. (2020) で使用されている指標を用いて stimulation (程よく刺激的な関わり) の度合いについて評定する予定であった。アタッチメントタイプの評定自体も映像を繰り返して見て行う必要がある、相当な時間を要するため、本稿において報告できるサンプルサイズと評定にかかる時間を天秤にかけ、本研究では30ケース分のアタッチメントタイプの報告を行った。今後、時間をかけて、残りのケースの評定と全てのケースの関わりの方の評定を行い、関わりの方とアタッチメントタイプの関連も検討する必要がある。例えば、育児の楽しさも、関わりの方 (感性) と組み合わせさせてアタッチメントタイプと関連することが報告されており (Brown & Cox, 2020)、そのようにいくつかの変数の交互作用を検討することも求められている。心拍データの解析も同様である。

本研究は、乳幼児期の父子関係におけるアタッチメントタイプを評定したおそらく初めての研究である。先述したように、国外でもせいぜい十数件しかなく、今後は国外の研究者と、SSPを使った評定の妥当性、評定基準の適用可能性 (例えば、本研究のように、分離時に泣くが再会時に近接がないケースの判断) を議論していく必要があるだろう。

父親を、それも子どもと一緒にサンプリングすることのハードルは高く、サンプルの偏りを犠牲にせざるを得なかったことも本研究の限界点であると言えるかもしれない。本研究の30ケースのうち、ほぼ全てのケースが大卒であり、全体の世帯年収の平均も1000万円を超える。これは東京都心で参加者を募集したことによる影響が大きいだろう。しかし、逆に言えば、こうした高SESのサンプルであっても、メタ分析と同じような3種類の分類割合になったということは、それ自体有意義な結果であるかもしれない。学歴や収入が高くても父子間のアタッチメントタイプが安定型にはならないということは示唆に富むものであると言える。

先述したことの繰り返しだが、今後は継続してデータを収集し、適切なサンプルサイズで、父親の関わりの方を含めた分析を行った結果を国外に向けて公表し、国外の研究者らと議論を行っていきたいと考える。

引用文献

- Achenbach, T. M., & Rescorla, L. A. (2000). Manual for the ASEBA preschool forms & profiles: An integrated system of multi-informant assessment. Burlington, VT: University of Vermont, Research Center for Children, Youth, and Families.
- Altenburger, L. E., & Schoppe-Sullivan, S. J. (2020). New fathers' parenting quality: Personal, contextual, and child precursors. *Journal of Family Psychology*, 34(7), 857-866.

- Bretherton, I. (2010). Fathers in attachment theory and research: A review. *Early Child Development and Care, 180*(1-2), 9–23.
- Brown, G. L., & Cox, M. J. (2020). Pleasure in parenting and father-child attachment security. *Attachment & human development, 22*(1), 51–65.
- Brown, G. L., Mangelsdorf, S. C., & Neff, C. (2012). Father involvement, paternal sensitivity, and father – child attachment security in the first 3 years. *Journal of Family Psychology, 26*(3), 421–430.
- Doi, Y., & Minowa, M. (2003). Factor structure of the 12-item General Health Questionnaire in the Japanese general adult population. *Psychiatry and Clinical Neurosciences, 57*(4), 379–383.
- Fagot. (1985). Development of a pleasure in parenting scale. *Infant and Child Development, 4*(2), 75–82.
- Laranjo, J., Bernier, A., & Meins, E. (2008). Associations between maternal mind-mindedness and infant attachment security: Investigating the mediating role of maternal sensitivity. *Infant Behavior & Development, 31*(4), 688–695.
- Madigan, S., Fearon, R. M. P., van IJzendoorn, M. H., Duschinsky, R., Schuengel, C., Bakermans-Kranenburg, M. J., Ly, A., Cooke, J. E., Deneault, A.-A., Oosterman, M., & Verhage, M. L. (2023). The first 20, 000 strange situation procedures: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin, 149*(1-2), 99–132.
- McBride, B. A., & Mills, G. A. (1993). Parental Responsibility Scale. *Early Childhood Research Quarterly, 8*(4), 457–477.
- Olsavsky, A. L., Berrigan, M. N., Schoppe-Sullivan, S. J., Brown, G. L., & Kamp Dush, C. M. (2020). Paternal stimulation and father-infant attachment. *Attachment & Human Development, 22*(1), 15–26.
- Palm, G. (2014). Attachment theory and fathers: Moving from “being there” to “being with”. *Journal of Family Theory & Review, 6*(4), 282–297.
- Pederson, D. R., Moran, G., & Bento, S. (1999). *Maternal behaviour Q-sort*. Psychology Publications.
- StGeorge, J., & Freeman, E. (2017). Measurement of father-child rough-and-tumble play and its relations to child behavior. *Infant Mental Health Journal, 38*(6), 709–725.
- Verhage, M. L., Schuengel, C., Madigan, S., Fearon, R. M. P., Oosterman, M., Cassibba, R., Bakermans-Kranenburg, M. J., & van IJzendoorn, M. H. (2016). Narrowing the transmission gap: A synthesis of three decades of research on intergenerational transmission of attachment. *Psychological Bulletin, 142*(4), 337–366.
- Whipple, N., Bernier, A., & Mageau, G. A. (2011). A dimensional approach to maternal attachment state of mind: Relations to maternal sensitivity and maternal autonomy support.

Developmental Psychology, 47(2), 396-403.